ペニー・サマーフィールド「主観性、自己、歴史学の実践」

Penny Summerfield, “Subjectivity, the self and historical practice”, Sasha Handley, Rohan McWilliam and Lucy Noakes (eds.), *New directions in social and cultural history*, Bloomsbury Academic, 2018, pp. 21-44.

紹介

文化論的転回以降の自己や主観性に関する歴史研究の動向が、ケーススタディを参照しながら整理されている。ポスト構造主義、ポストコロニアル、フェミニズム、精神分析の理論が紹介されている。

1. 導入部 (Introduction, pp. 21-22)

・ E・H・カーの批判 (1961 年) ¹

カーが批判したのは、個人の性格や行動(とりわけ偉人の)を重視する歴史学。彼は経済史や社会史といったタイプの歴史学を発展させようとし、数量的な証拠を含む幅広い史料を利用して変化の根底にある原因を特定するように促した。

・ リチャード・エヴァンズの批判 (1997 年) ²

カー以降、歴史学の議論には反動が生じた。エヴァンズは、平均値や統計を信頼することで個としての人間を消し去っていると批判。

・ グローバルに展開する積極的な個人主義の文脈で、歴史の関心は個人に移ってきた。

・ 本論文の目的

自己や個人を歴史学の価値ある対象として扱ってきた知的潮流を検討すること。ケーススタディを利用しつつ、歴史家が主観性(subjectivity)をどのように理解し分析してきたかを問い、過去におけるユニークな自己と、歴史学が関心を寄せるような一般的なプロセスとを仲介するための史料や方法について検討する。

¹ E. H. Carr, *What Is History?*, London: Macmillan, 1961. [清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波書店、1962年]。

² Richard J. Evans, *In Defence of History*, London: Granta Books, 1997. [佐々木龍馬、與田純訳『歴史学の擁護 — ポストモダニズムとの対話』晃洋書房、1999年]。

2. 量的な歴史学と質的な歴史学(Quantitative and qualitative histories, pp. 22-24)

- ・ 1980年代以降に歴史学に復権した個人は、1960年代初頭にカーが批判したのと同じではなかった。
 - ・ 歴史学において社会的な力に注目することは、カーによって支持され、1960年代の新しい社会史によって発展した。政治的事件は大衆の活動や物質的条件という文脈の中で考察されるようになり、「下からの歴史」が確立されていった。
 - ・ こうした動向には、これまで無視されてきた社会集団を歴史学の対象として回復することも含まれていた。
 - ・ 人口動態や出生、死、結婚、賃金と収入といった経済的データのような数量的証拠が優先される一方で、自伝的に表現された史料の利用や、オーラル・ヒストリーのような方法論の発展も刺激された。
 - ・ 研究の焦点は、君主や偉人ではなく「普通の人々」(ordinary people)に、「下からの歴史」によって明るみに出された社会集団のメンバーに当てられるようになった。歴史家はこうした個人の声の背後から大衆の経験を理解した。
 - ・ つまり、社会史家や文化史家は、「復権した個人」を孤立した存在としてではなく、集団の一部としてみなしてきた。一つの声は、自身と集団の両方のために語っているものとして聞かれた。
- ・ 史料のさまざまな呼称
- 自己に焦点を当てた歴史にとって重要な史料は、「個人の証言」(personal testimony)、「個人の語り」(personal narratives)、「ライフ・ストーリー」(life stories)、「ライフ・ヒストリー」(life histories)、「エゴ・ドキュメント」(ego documents)と呼ばれる。これらの語が示す歴史学の実践は重なり合うところもあるが、それぞれ異なるアプローチを有する。
- ① 「個人の証言」：特にアメリカにおいては、残虐行為の目撃証言と結びつく語として用いられる（例えば、ホロコーストやショアー）。
 - ② 「個人の語り」：研究者によっては、法的効力を含意する「証言」から他の主観的、自伝的な語りを区別するために、この語を好んで使用することがある。
 - ③ 「ライフ・ヒストリー」：この語は人類学において、年代順、人生の段階に応じた構造、事実中心的であることによって特徴づけられている。
 - ④ 「ライフ・ストーリー」：自伝的実践の創造的、解釈的特徴を認める語として、ライフ・ヒストリーよりもこの語の使用を勧める研究者がいる。ライフ・ヒストリーのように語りが真実であるという含意がなく、虚構の可能性も含んでいる。

- ・これらの史料に対する歴史家の立場はさまざま。
 - ①語りの正確性や真実性を重視する立場。
 - ②語り手による過去の解釈を重視する立場。
 - ③主観性は、文脈の変化や人生における過去の意味を新たに反省することにより変化するものであって、静的で安定しているわけではないという立場。
 - 「個人の語り」を自己の創造的な表象とみなす歴史家と、それらを潜在的に数量化可能な史料とみなし、それらに固有の主観性に対しては慎重な歴史家との間に大きな溝が存在する。

- ・デイヴィッド・ヴィンセントは、自伝においてもっとも価値があるのは主観性の要素であるとして数量的な方法を否定³。
- ・ジェーン・ハンフリーは、ヴィンセントを批判し、自伝の欠点は統計的に最小化することが可能であると主張⁴。
 - 過去 40 年間に個人の証言は史料としての人気を博してきたが、研究の目的や方法論はさまざまであった。

- ・自己や主観性の研究に影響を与えたのは、「ポスト構造主義」、「ポストコロニアリズム」、「フェミニズム」、「精神分析」。
 - これらを以下で検討することになる。

3. 文化論的転回(The cultural turn, pp. 25-27)

- ・ポスト構造主義（あるいはポストモダニズム）は、主観性の問題に関して二つの正反対な方向に機能した。
 - ①生きた歴史的主体の研究は時間の無駄であることを提示した。
 - ②自己についての新しい考え方をもたらした。

- ・フーコーによれば、自己は自律的で一貫したものではない。むしろ、それは文化的に構築されたものであり、さまざまな制度的文脈の中に行きわたる言説によって「生み出された」(interpellated)もの。

³ David Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom: A Study of Nineteenth century Working Class Autobiography*, London: Methuen, 1981. [川北稔、松浦京子訳『パンと知識と解放と — 19世紀イギリス労働者階級の自叙伝を読む』岩波書店、1991年]。

⁴ Jane Humphries, *Childhood and Child Labour in the British Industrial Revolution*, Cambridge: Cambridge University Press, 2010.

- ・ポスト構造主義的な主観性の概念では、「私」が思考の統一的な中心ではなくなった。それはイデオロギー的な言説により構成された、矛盾する統一性のないカテゴリーに過ぎない。
→文化論的転回が研究対象として提示したのは、個人やその意識というより、主体を生み出す制度や言説であった。
- ・他方で、フーコーは経験を否定し、人間の主体的な営みを無視していると批判された。
- ・ポスト構造主義の理論は、それぞれの主体が日々の生活の中で言説を仲介する方法を無視しているように思われた。また、言説に対する応答や防衛によって、自分自身を構成する能力が個人にあるとは考えていなかった。
- ・研究者たちの中には、ポスト構造主義の多くの知見を受け入れつつ、人間の思考や行為に相対的な自律性があることを主張する者もいた。
→ミシェル・ド・セルトール⁵、ロジェ・シャルティエ⁶、キャスリーン・カニング⁷
- ・文化論的転回は、自己を研究の対象とするように直接促したわけではないが、主観性にも歴史があることを提示した。また、歴史家が自分たちの営みに対してより自覚的になるように促した。

4. 主観性、言語、物語り (Subjectivity, language and narrative, pp. 27-28)

- ・多くの歴史家が文化論的転回の影響を受けたが、個人の証言による自己の探求に関して、文化論的転回が切り開いた道を辿る歴史家は比較的少なかった。
- ・こうした少数の歴史家のうちの一人がパトリック・ジョイス。
- ・ジョイスのポスト構造主義的アプローチの中心に位置しているのは、「言語」、「想像力」(imagination)、「物語り」である。ジョイスによれば、階級とは現実にあるものではなく、想像された存在でしかない。貧困も同じようにジョイスにとっては外的な現実ではなく、それが存在するためには想像され名付けられなくてはならない経験である。
- ・ジョイスが考察するのは、「主観性」、「自己としての主体」、「想像された集団性としての主体」。物語り、つまり「社会的想像性」(social imaginary)は社会的主体に意味を付与し、その時代の人々が日々の社会関係を生きる手段となる。

⁵ Michel de Certeau, *The Practice of Everyday Life*, trans. Steven Rendall, Berkeley: University of California Press, 1984. [山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社、1987年]。

⁶ Roger Chartier, *Cultural History: Between Practices and Representations*, Cambridge: Polity Press, 1988.

⁷ Kathleen Canning, 'Feminist History after the Linguistic Turn: Historicizing Discourse and Experience', *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 19, 1994, pp. 373-4.

- ・物語りによる主観性の構築は、アイデンティティが中心から外れていて不安定であること、表象と現実との区別はぼやけていることを示している。
- ・ケーススタディ：パトリック・ジョイス『民主主義的主体 — 19 世紀イングランドにおける自己と社会的なるもの』⁸
- ・同書において、ジョイスはエドウィン・ウォーという人物の日記に注目している。
- ・ウォーの父親は早くに亡くなり母親が靴屋を継いだが、一家は屋根裏暮らしに転落しイラクサで糊口を凌いだ。それにもかかわらず、母親はウォーに教育を与えた。ウォーの思考や感情は、信仰、とくにメソジスト派の教義に満たされていた。ウォーは印刷工の徒弟になり、のちに牧師に、最後に方言詩人になった。
- ・ジョイスの議論は文化論的転回の影響を示している。つまり、ジョイスはウォーを労働者階級という社会階級の産物としては見なかった。また、ウォーの日記が階級的な地位をどのように反映しているか探るというアプローチも拒否した。
- ・ジョイスは、フーコー的な統治性の概念を参考にしつつ、ウォーの日記を彼が積極的に主観性を形成した手段として捉える。ジョイスによれば、日記とは自己を統制する技術であり、この時期に利用できた数多くある「コミュニケーションの技術」の一つであり、「自己にとって自己を可視化すること」と関係していた。
- ・ウォーは日記において告白体を用いた。だが、ジョイスによれば、ウォーは霊的な語りを書いたのではなく、むしろ社会的存在としての彼自身の記述を告白と組み合わせていた。ジョイスが示しているのは、ウォーが彼自身を啓蒙主義者(Enlightenment Man)として構築するために、新聞や同時代の思想家たちをどのように利用したかである。日記における苦悶した語りを通して、ウォーは自分を「労働者階級」としてではなく、「民主主義の主体」として、ウォーが想像した人間性の「一つの家」の一員として構築した。

5. 自己の技術 (Technologies of the self, pp. 28-29)

- ・ジョイスによれば、社会階級は 19 世紀半ばにおいて自分自身と世界とを表現しようとする人たちにとって利用可能な、多くの競合するアイデンティティの一つに過ぎなかった。また、民主主義を形成し、民主主義的な主体を定義したのは階級という考え方だけではなく、またそれが有力というわけでもなかった。むしろ、多くの社会の語り(social narratives)が民衆文化や宗教から生じ、自己や社会的なものについて、またこの両者のつながりについての考え方を提示した。
- ・階級が民主主義の興隆の決定要素だと考える歴史家はほとんどいない。ジョイスが歴史

⁸ Patrick Joyce, *Democratic Subjects: The Self and the Social in Nineteenth-century England*, Cambridge, 1994.

学に貢献したのは、社会的なものとの関係における自己や主観性についての考え方に
関してである。

- ・ジョイスは、個人の語りを生み出す実践（たとえば日記）を記述するために、歴史家が
どのように「自己の技術」という概念を用いるかを提示した。
- ・この概念は、語りの実践が自己構築(self-construction)だけでなく自己統制(self-regulation)
の手段であったという考え方を示している。
- ・さらに、主観性の創造において社会の語りと個人の語りとの相互関係を歴史的に探究す
ることを示唆している。

6. 自己と「他者」(The self and the 'other', pp. 29-32)

- ・ポストコロニアル研究や女性史、ジェンダー史の展開と一致するポスト構造主義の重要
な一側面は、一見正反対の存在が実際には互いを構成しているというジャック・デリダ
の知見である。
- ・男性性と女性性、富と貧困、黒人と白人などは、一方を理解するのに他方を必要とする。
- ・自己と社会的なものも同様に他方を構成する。「他者」は自己を含意しており、自己の
歴史は社会的なものの歴史であり、社会的なものの歴史は自己の歴史でもある。
- ・ポストコロニアルの研究者たちは「他者」概念を洗練させてきた。

- ・ケーススタディ：アントワネット・バートン『帝国の中心にて』⁹
- ・同書において、バートンは後期ヴィクトリア朝の帝国イデオロギーと植民地的ステレオ
タイプとの相互作用を通して、植民地的な主体がどのように「他者」としての自己構築
を経験したかを探った（エキゾチックで東洋的で、本質的に異なる者としての他者）。
- ・バートンが利用したのは、イギリスに旅した三人のインド人（たとえば、オックスフォ
ード大学に留学したコルネリア・ソラブジという名の女性）の手紙や回想録。こうした
史料からバートンは、他者化の過程に対する個人の反応や、彼女たち自身のそうした過
程への関与を引き出した。それによって、バートンは反復的で相互関係的な主観性のプ
ロセスを描くことができた。
- ・バートンによれば、文化的アイデンティティの構築は、ある南アジア人たちを「インド
人」として規定し、さらにこの過程において、ブリテン島の人たち(Britons)を「イギリ
ス人」(British)として一体化するように機能した。

⁹ Antoinette Burton, *At the Heart of the Empire: Indians and the Colonial Encounter in Late-Victorian Britain*, Berkeley: University of California Press, 1998

7. 言説と主観性(Discourse and subjectivity, pp. 32-34)

- ・「他者化」や、個的な主体と公的な言説との関係は、主観性を構成するのにどのように機能するのだろうか。このことはポストコロニアルの歴史学だけでなくフェミニストの歴史学における関心事でもあった。
- ・フェミニズム理論によれば、文化を横断する公的言説において女性に与えられているのは、女性のアイデンティティを男性のアイデンティティから区別するだけでなく、実現不可能で矛盾しているような、ふるまい、思考、外見のモデルである。
- ・こうした複雑な文化的逆流(cultural cross-currents)の内部で、女たちは自分たちを女性として構成する言説を選択し、それらを実行しようと奮闘している。
- ・このアプローチの可能性ははかりしれない。それは研究の主体として男性の歴史を切り開き、ジェンダー史学の支柱となり、社会史と文化史の重要な構成要素となった。

- ・ケーススタディ：ペニー・サマーフィールド『女たちの戦時中の生活を再構築する——第二次世界大戦のオーラル・ヒストリーにおける言説と主観性』¹⁰
- ・サマーフィールドによれば、1939-45年のイギリスでは女性に関する以下の二つの強力な物語りが流通していた。彼女はこの時期に戦争を経験した女性たちへのインタビューを行った。
 - ①愛国的な感情から、自分の選択を戦争への奉仕の犠牲にする用意があった積極的な女たちを構築した言説。
 - ②戦時下の窮乏した状況で家に留まり、配給や不足にストイックに対処することがもっとも重要であるという、伝統的な女性性を強調した言説。

8. 主観的、間主観的な安心(Subjective and intersubjective composure, pp. 34-35)

- ・なぜある女は①の言説に依拠し、他の女は②の言説を用いたのか(これは同じ人物において戦時中と戦後で異なることもあった)。これを説明するのは歴史家にとって容易ではない。
- ・「安心」(composure)という概念による説明が一つの可能性としてあり得る。これは回想において公的なものと個人的なものとの関係性を説明するために、文化史家が発展させた概念である。

¹⁰ Penny Summerfield, *Reconstructing Women's Wartime Lives: Discourse and Subjectivity in Oral Histories of the Second World War*, Manchester: Manchester University Press, 1998.

- ・この概念は二重のプロセスを有する。
 - ①一方で、語り手は聞き手によって承認されると期待する公的なモデルを選択的に利用することで、自分自身についての物語(stories)を組み立てる。
 - ②他方で、語り手は個人的な安心(personal composure)、あるいは心理的な平静(psychic equilibrium)が確保されることを求める。これが実現されるかいなかは多くの要因に依拠している(たとえば、語り手の精神状態、自分の生の価値をどれくらい確かなものと感じているか、聞き手とのやり取りによって刺激された記憶、聞き手から受け取る励ましや肯定の程度)。語り手と聞き手の間主観的関係性が、語り手に「不安」(discomposure)を生じさせることもある。
 - 彼女たちが語る報告には、意識的な戦略(①に相当)の部分と、無意識的、心理的な部分(②に相当)がある。
- ・聞き手の無理解は部分的には文化的要因によって説明され得る。
- ・戦時中の個人的な経験(サマーフィールドがインタビューにより調査した)の背後にある文脈は、語り手の女性たちが話した時点では、公的な言説の中であまり知られておらず、そうした経験が学者の興味を引くこともほとんどなかった。
- ・20世紀末にかけてそうした経験への関心が増加したことは、そのこと自体が過去について一般化された物語が変容する兆しであった。
- ・公的な言説が変容するにつれて経験は多少だが話すことができるようになる。

9. 精神分析と自己(Psychoanalysis and the self, pp. 35-37)

- ・「安心」という概念は、個人の語りの中で主観性が構成、再構成される過程を理解しようとする歴史家によって用いられてきた。
- ・ところが、ジェンダー理論と精神分析の技術を歴史に応用しようとする歴史家は、精神的過程に深く取り組むことなくこの概念を用いる人々を批判している。
- ・ミシェル・ローパーによれば、歴史家は公的な言語の力を強調し過ぎており、無意識の作用を無視している。

- ・ケーススタディ：ミシェル・ローパー「英雄である兵士を再び記憶すること——第一次世界大戦の個人の語りにおける記憶の精神的、社会的構築」¹¹
- ・同論文においてローパーは、第一次大戦期の下級士官であったリンダル・ウルヴィックの回想録について研究した。

¹¹ Michael Roper, "Re-remembering the Soldier Hero: The Psychic and Social Construction of Memory in Personal Narratives of the Great War", *History Workshop Journal*, 50, 2000.

- ・ ウルヴィックの回想には、書かれた時期の異なるものが複数あった。
 - ①1914年：急性腸炎に襲われて前線から近くの野戦病院に這いだして逃げたことが、母親に宛てた手紙の中で書かれている
 - ②1955年：腸炎については短く触れただけで、その後の参謀将校としての経験に焦点を当てている。
 - ③1970年代：焦点は再び前線からの撤退に戻り、理由を中隊長の命令に帰している。
- ・ ローパーはこれらの差異を部分的には次のような公的な言説の変化に関連付けている。
- ・ 戦争の直後は、「英雄である兵士」の勇敢さや忍耐が祝福されたが、塹壕戦に従事した人たちへの憐れみが寄せられるようになり、1970年代にはミリタリズムの価値そのものが疑われるようになった。
- ・ ところが、ローパーは公的な言説だけでなく、「過去と現在の精神的な必要」(the psychic needs of the past and the present)が、無意識のうちに記憶の形成を促したと主張する。
- ・ この「精神的な必要」を説明するために、ローパーは「分裂」(splitting)と「隠蔽記憶」(screen memory)という精神分析の概念を用いた。
- ・ 1955年の証言がなされたのは、ウルヴィックがマネジメントの専門家として公的な評価を受けたいと思っていた時期であり、恐怖や逃げ出した記憶は無意識のうちに従属的な位置に置かれた。そのため、病気には簡単な言及しかなかった。
- ・ 1970年代の回想は、対照的に、公的な評価が受けられないことに失望していた時期であり、また軍隊での努力の価値が公的な言説において疑われた時期であった。ローパーによれば、ウルヴィックは第一次大戦を集団的な努力の場として見る視点を利用したが、この視点は病気のために前線を去る自分の勇敢さや仲間意識に関して、自己不信をもたらした。この緊張が「隠蔽記憶」を引き起こし、1914年の手紙に書かれていた記憶を意識から覆い隠すことになった。

10. 結論(Conclusion, pp. 37-38)

- ・ 主観性が歴史の正当な主題となったことにより、歴史には個人が回復されることになった。あらゆる個人は社会的存在であり、どれほど例外的でユニークな生であっても、その個人には大きな社会的なプロセスが表れている。
- ・ 1980年代の文化論的転回に続いて花開いた理論的な観点は、歴史の探求の内部に自己や主観性を確立するのを助けた。
- ・ ポスト構造主義は、主体が公的な語りを通じて構築されることを強調し、公的な語りを知のレジームの内部で個人を「生み出す」(interpellated)とした。

- ・ポストコロニアルやフェミストの理論は、そうした言説が「行為主体性」(agency)の場でもあることを主張した。
- ・精神分析は、歴史家にとって役に立つさまざまな概念を与えてくれた。ところが、そうした概念が普遍化をもたらしてしまうことは問題視されている。
- ・主観性や自己に取り組む歴史家たちは、歴史学の「新しい動向」に貢献してきた。この新しい動向の中で、個人の語りの中の矛盾、不正確、虚構は「歪み」として退けられるのではなく、それらが埋め込まれている社会史的、文化史的文脈を照らす光として分析されるようになった。